宿場町
ひらかた

第８４号

発　行
宿場町枚方を考える会
会長　堀家　啓男
072-892-5504

事務局
枚方市出口２丁目6-6
上野幸夫　072-832-5722

編 集 広報委員会

主な内容

○ 枚方市長に要望書を提出（1頁）
○ 野崎詣りを体験（2頁～7頁）
○ 関宿をぶらり（8頁～10頁）
○ 枚方浜の朝鮮通信使（11頁～16頁）

市立歴史博物館
府下の実態調査と整備
伏見枚方市長に要望

本会は平成28年9月6日、伏見隆枚方市長と面談、「市立歴史博物館の府下における設置実態の調査と整備について」の要望書を提出しました。

歴史博物館は、先人が築いてきた歴史を時代ごとに顕彰し、次代に継承しながら市民の郷土愛を高め、文化の発展を図る施設です。会則第二条では「歴史博物館設立のための事業」を規定、かねてから要望していた懸案の一つです。

いわゆる博物館とは、「博物館法」に規定されている施設ですが、設置基準やコストなどから全国の同種施設は法の枠外にある「博物館類似施設」と呼ばれている施設です。

伏見市長（左端）に要望書を提出

本来、「博物館法」に規定されている施設が望ましいのですが、財政的にも資料的にも困難が予想され、本会としてはとりあえず枚方の歴史を学べる類似施設を要望、また新設ではなく、既設・遊休施設の活用を念頭に置いています。

今回の要望には、市から伏見市長を始め、中路清社会教育部長、鈴江智副参事兼文化財課長、今木隆茂まちづくり推進課長が出席、本会からは堀家会長、上谷副会長など役員8人が出席しました。また本会会員の山口勤市議会議員にも同席をいただき、「市の遊休施設の活用を図るなど、ぜひ具体的な検討を…」との要請をしていただきました。

近郊を歩く会に参加
野崎詣りを体験

三栗　石川　勲

平成28年度最初の行事は「近郊を歩く会」、「天東・野崎観音詣りコース」と題して大東市の野崎観音（慈眼寺）などを訪ねました。

「近郊を歩く会」は現地集合・現地解散が原則です。よい天候に恵まれた5月15日の午前9時30分、会員など38人の皆さんがJR野崎駅前に集合しました。ガイド役の堀家会長からコースや注意事項など、簡単な説明を受けて出発しました。

出発前の説明

野崎詣りの始まり

もともとは旧暦の4月1日から8日（現在は新暦の5月1日～8日）まで行われる無縁経法要（有縁・無縁すべてのものに感謝のお経を捧げる）への参詣を「野崎詣り」と称していました。

寛文11年（1671年）、五世大真（だいしん）和尚が参拝客の増加、寺の興隆を図るため、無縁経法要に合わせて秘仏の十一面観音菩薩像を開帳、これを知らせる看板を大坂の各地に立てました。テレビや新聞のない時代のPR作戦です。

この作戦が功を奏し、時候や眺めも良く、娯楽を兼ねた庶民の手頃な日帰り旅行として参拝客で賑わうようになりました。さらに、人形浄瑠璃や落語の舞台になると、多くの人々に知られるようになりました。

観音浜の碑

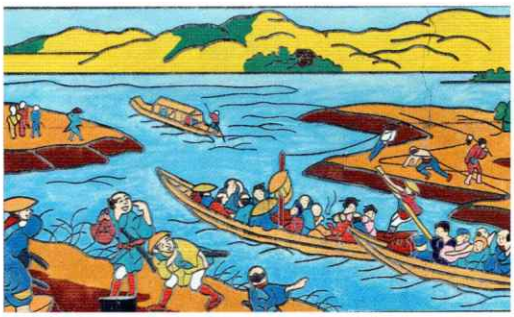
最初の見学地は野崎駅の南南西300メートルにある「観音浜の碑」です。

野崎詣りの道筋として、大坂からは水路と陸路がありました。船に乗る水路の参拝者

と土手を歩く陸路の参拝者とが罵り合う、「ふり売り喧嘩」と呼ばれた奇習があり、勝つと一年の幸があるといわれていました。水路の場合、ここ観音浜が観音井路（現在の谷田川）の終着点でした。

「観音浜の碑」近くの谷田川で泳ぐカルガモの親子

人々はここで船を降り、徒歩で次々項の専応寺を経て、野崎観音にお参りするのが一般的な「野崎詣り」のコースでした。


野崎駅に近い谷田川の側壁に描かれた船による野崎詣り。

歴史民俗資料館

次に、観音浜の碑から直線で西へ500メートルにある「大東市立歴史民俗資料館」を訪ねました。

旧四条小学校を活用して設けられた総合施設「来ぶらり四条」の2階にあり、大東市の歴史・文化財を学び、合わせて情報発信の拠点として平成24年4月1日にオープンしました。館内には市内で出土した土器や甲冑が展示されています。

来ぶらり四条玄関

野外には、昭和62年に発掘調査された「宮谷1号墳横穴式石室」が移設され、復元展示されています。

この石室は、片袖式石室を持つ直径20メートルの円墳で、6世紀後半に築造されたと考えられています。中世（12世紀～13世紀）に盗掘され、荒らされていましたが、耳飾りとして使われた金環や鉄鎌、須恵器などの副葬品が残っていました。古墳の規模から、被葬者は当時の有力者と推定されています。

石室の展示

東高野街道

「横穴式石室」の横にある緩やかな坂道を上ると、すぐに東高野街道に出ます。ご存

知のように八幡市から枚方市を通り、河内長野市に至る（以南は高野街道）高野山への参詣道です。東高野街道を少し北進し、右折すると専応寺に着きました。「歴史民俗資料館」から２００メートルほどの距離です。

専応寺（せんのうじ）

浄土真宗本願寺派（通称お西さん）のお寺で、開祖は親鸞二十四輩（にじゅうよはい）の一人、唯信（ゆいしん）とされています。江戸時代中期の建築様式による山門、本堂、鐘楼などがあります。

大東市教育委員会が設置した現地説明板によると、15世紀末から16世紀初頭にかけて寺院としての基礎が確立、戦国時代に荒廃したものの、江戸時代の初期に再建され、中期までに本堂や太子堂が整備されました。

太子堂

境内の一角にあります。聖徳太子の自作と伝わる孝養像（父用明天皇の病気平癒を祈願する太子十六歳の姿）が安置されており、毎年春秋の彼岸に開帳されています。

道標

いわゆる「野崎詣り」とは、太子堂に詣でてから野崎観音（慈眼寺）に向うのが一般的な道筋だったようで、太子堂の向い側にある山門の傍らに「太子堂道」と記された道標が建っています。

かつては専応寺と野崎観音を結ぶ別の道があったようで

すが、その道が廃止されたので、現在の場所に移設されたようです。

手水鉢

太子堂の向かい側に手水舎があり、中に四角い手水鉢があります。

第二代将軍徳川秀忠の時代、大坂城の築城に際し、幕府は宮津藩主だった京極丹後守高知（きょうごくたんごのかみたかとも）に野崎山麓の石を切り出すよう命じました。

この大名普請の任にあたり、京極丹後守は専応寺に陣屋を設け、数年間滞在しました。逗留の礼として、当時の太子堂回りの石垣と階段を積み、さらに感謝の印として寄進したのが手水鉢です。

野崎観音（慈眼寺）

最終目的地である野崎観音に着いたのは午前11時半でした。専応寺から直線距離で北北東250メートルにあります。いわゆる野崎観音は通称名で、正式には山号が「福聚山（ふくじゅざん）」、寺名は「慈眼寺（じげんじ）」、曹洞宗のお寺です。寺のホームページなどによると、天平勝宝年間（8世紀中ほど）、大仏開眼のために来朝していたインドの婆羅門僧正が、行基に「野崎の地は、釈迦が始めて仏法を説いた鹿野苑（はらな）によく似ている」と伝えました。感動した行基が、みずから白樺の木で観音像を彫り、この地に安置したのが寺の始まりとされています。

現在の本尊である十一面観音菩薩は白檀の一木彫りです。秘仏ですが、初詣り（1月）、野崎詣り（5月）、千日詣り（7月）の年3回開帳されています。なお、長谷寺（桜井市）の本尊（十一面観音菩薩立像・重要文化財）と同木といわれています。

楼　門

野崎観音に着くと、まず階段が待っていました。若い人でも一気に山門まで上ると息が乱れます。山門は2門あり、西側に正門、南側に南門があります。正門は一般のお寺の山門と変わりませんが、南門は楼門です。私たちは、本堂が正面に見える楼門から入りました。

楼門は二層式で、一層目は袴腰です。漆喰で塗り固められており、こうした末広がり様式の門は竜宮門と呼ばれています。なお、平成26年に本

会が訪問した伏見の建長寺も竜宮門の山門でした。

本　堂

楼門から境内に入ると境内広場があります。広場にはさらに3本の階段があり、中央の階段を上った正面に本堂があります。

現在の本堂は昭和25年、十九世尾瀧一峰和尚が河内一円を托鉢、その浄財により日下大龍寺（東大阪市日下町）の観音堂を譲り受け、解体して移築したものです。棟木には元禄8年（1695年）の銘が残っているそうです。

本堂には本尊の十一面観音菩薩が安置されています。また、寺宝とされている狩野探信（江戸中期の画家）が描いた「釈迦涅槃図絵」あり、毎年2月に開帳されています。

さらに平成11年に地元の子どもたちにより除幕され、開眼された「花蝶菩薩（かちょうぼさつ）」の壁画がありま す。この壁画は、尾瀧一峰和尚の朋友である中村恒夫画伯が描いた力作で、「花蝶菩薩」は和尚が命名しました。

梵　鐘

本堂の横から見晴台に向う途中に鐘楼があります。梵鐘は宝永5年（1708年）の鋳造で「枚方住田中河内大目藤原家成」の銘があり、枚方製です。

寺のホームページでは、「野崎の鐘の突きっ放しといわれ、いつ突いてもかまわないのですが、連打は火事の知らせなので厳禁です」となっています。しかし、平成20年の元旦に、鐘を突く撞木（しゅもく）の金具が外れて落下、突いていた女性が負傷する事故があり、現在は突くことができません。

この梵鐘の内側には「十」印があります。これを十字架とし、さらに観音をマリヤに見立てて、野崎観音を「隠れキリシタンの寺」とする説があります。

かつて野崎観音近くの山で多くのキリシタンが処刑された悲しい歴史があり、鐘の音は殉教者に対する鎮魂の思いが込められていたのかも知れません。もちろん寺のホームページは、「十」印について一切言及していません。

楼門前には一対の石灯籠があります。安永6年（1777年）の寄進で、「願主　肥前国平戸住　紙屋和三郎」と刻まれています。

大坂から遠く離れた「隠れキリシタンの里」ともいわれる平戸からの寄進は、野崎観音を「隠れキリシタンの寺」とする傍証の一つといわれています。

石造九重層塔

礎石に永仁2年（1294年）と刻まれており、北河内

では最古の層塔といわれています。すでに相輪部分は失われていましたが、さらに昭和9年（1934年）の室戸台風で倒壊、最上層の屋根石が行方不明となり、八重層で組み直されました。

昭和59年になり、地元の中学生が屋根石を発見しましたが、礎石の横に置かれたままになっていました。平成17年になって方角を修正し、本来の九重層塔として復元されました。

高さ3．3メートルの花崗岩製で、全体の造り、梵字の刻み方などから鎌倉時代の特徴をよく示しているといわれ、昭和58年に大東市の文化財に指定されています。

お染久松の塚

境内広場の西側に庭園があり、その奥にある石碑です。大坂の油問屋の一人娘お染が店の丁稚久松と恋仲になり、心中に至る2人の悲恋は、実在の事件を脚色した「お染久松もの」となり、人形浄瑠璃や歌舞伎の演目として上演されてきました。

安永9年（1780年）に初演となった近松半二の「新版歌祭文（しんぱんうたざいもん）」では、お染が野崎詣りと偽り、久松のいる野崎村を訪ねる「野崎村の段」があります。野崎詣りの流行が舞台設定につながったと思われます。

野崎小唄

すでに人形浄瑠璃や歌舞伎で広く知られていた野崎観音ですが、全国区のレベルまで広めたのは東海林太郎が歌った「野崎小唄」です。歌詞を記した歌碑は、野崎観音の境内はもちろん、集合場所だったJR野崎駅近くの谷田川の側壁にもありました。

作詞「今中楓渓（いまなか・ふうけい）」、作曲「大村能章（おおむら・のうしょう）」によるこの歌は、昭和10年（1935年）10月にレコードが発売されると大ヒットしました。

ご存知の方もおられると思いますが、今中楓渓は枚方の人です。生まれは河内郡水走村（現・東大阪市）、本名は岩崎（旧姓）保治朗です。

明治39年に広島高等師範学校を卒業し、広島県や栃木県の教員になりました。その後、樟葉村の今中家に婿養子として入り、長く北河内郡立河北高等女学校（現・寝屋川高校）に在職していました。

今中楓渓は、北河内の多くの校歌を作詞しています。枚方市内では、樟葉小学校、枚方第二小学校、蹉跎小学校など、7校が今中の作詞です。

東海道五十七次・４７番目

関宿をぶらり

船橋本町　上谷　勝己

梅雨明けの7月19日(火)、真夏日の暑い中、関宿（三重県亀山市）を訪ねました。江戸時代、関宿はお江戸日本橋から47番目の宿場町として、参勤交代や伊勢参りの人々で賑わいました。近年、旧東海道の宿場町のほとんどが旧態を留めない中、唯一歴史的な町並みが残ることから、昭和59年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

関宿は、東西追分の間約1.8キロメートル、25ヘクタールにおよび、江戸時代から明治時代にかけて建てられた古い町家２００軒余りが残っています。ちなみに西追分からは坂下宿、東追分からは亀山宿へと続いていました。

鈴鹿関跡（すずかのせきあと）

関は古代から交通の要衝であり、古代の三関（さんかん）の一つ、「鈴鹿関」が置かれたところです。関の名もこの鈴鹿関に由来しています。鈴鹿関が初めて歴史に登場するのは壬申の乱（６７２年）で、天智天皇の死後、大友皇子と大海人皇子（後の天武天皇）が皇位を争った際、大海人皇子が鈴鹿と不破の関を固めたことも勝因とされています。

延暦8年（７８９年）、桓武天皇によって三関は廃止されますが、その後は天皇の崩御や政変などが起こるたびに儀式としての固関（封鎖）が行なわれました。

鈴鹿関跡の詳細な位置や規模は不明ですが、近年の調査では亀山市関町新所にある観音山公園で聖武天皇によって整備されたと見られる西限の城壁が確認されています。

ちなみに三関とは、鈴鹿関（伊勢国）、不破（ふわ）関（美濃国）、愛発（あらち）関（越前国）を言います。

東追分（ひがしおいわけ）（県指定史跡）

東海道と伊勢別街道の分岐点です。大鳥居は伊勢神宮を遥拝するためのもので、20年に一度の伊勢神宮式年遷宮の際、内宮宇治橋南詰の鳥居が移されてきます。常夜灯・道標なども残っています。

御馳走場（ごちそうば）

関宿に出入りする大名行列の一行を、宿役人が出迎えたり、見送ったりした場所です。関宿には四カ所の御馳走場がありました。

関まちなみ資料館

関宿の伝統的な町屋を公開した資料館です。関の文化財の紹介や、関宿に関係する歴

史資料などを展示しています。土蔵二階展示室では、町並み保存事業による町並みの移り変わりを一目で見ることができます。

山車倉（やまくら）

「関の山」という言葉の語源にもなった関宿の山車は、最盛期には16基ありました。互いに華美を競い、また狭い関宿を練ったことから生まれた言葉です。現在は4基の山車が残り、4ヵ所に山車倉（山車のガレージ）があります。

百六里庭（ひゃくろくりてい）・眺関亭（ちょうかんてい）

関宿の町並みの中にある小公園です。関宿が江戸から百六里余りにあることから名付けられました。通りに面した建物「眺関亭」からは、関宿の家並みが一望できます。

伊藤本陣跡（いとうほんじんあと）

関宿には川北本陣、伊藤本陣の二軒の本陣がありました。本陣は参勤交代の大名や、公家、公用の幕臣などが利用した格式の高い宿泊施設です。現在残るこの建物は、本陣の店部分にあたります。

福蔵寺（ふくぞうじ）・小万（こまん）の墓

関の小万は孝女の仇討で知られ、鈴鹿馬子唄にもうたわれています。その墓と記念碑が福蔵寺境内にあります。

鈴鹿馬子唄

1. さかはてるてる　すずかはくもる　あいのつちやま　あめがふる
2. うまがものゆた　すずかのさかで　おさんじょろならのしょとゆた
3. さかのしたでは　おおだけこたけ　やどがとりたや　こだけやに
4. よさくおもえば　てるひもくもる　せきのこまんの　なみだあめ

関宿旅籠玉屋歴史資料館（せきしゅくはたごたまや）

玉屋は「関で泊まるなら鶴屋か玉屋、まだも泊まるなら会津屋か」と謡われたほどの関宿を代表する大旅籠の一つです。

通常は月曜日ですが、訪問の前日が「海の日」で火曜日に休館していた。

江戸時代に建築された貴重な旅籠建築で当時使われてい

た道具類や庶民の旅に関係する歴史資料などを展示、江戸時代に栄えた旅籠の姿を再現しています。土蔵では「東海道五十三次」で有名な歌川広重の浮世絵を展示しています。

歌川広重（関 本陣早立）

関の特産・火縄

江戸時代の関の特産物として火縄があり、新所（西追分側）を中心に数十軒の火縄屋がありました。火縄は鉄砲に用いたため大名の御用がありましたが、道中の旅人が煙草などに使うためにも購入したため大いに繁盛しました。

郵便局・高札場

関宿のほぼ中心にある関郵便局は、江戸時代には高札場があったところです。

高札場

地蔵院（じぞういん）（国指定重要文化財）

「関の地蔵に振袖着せて、奈良の大仏婿に取ろ」の俗謡で名高い関地蔵院です。天平13年（741年）、行基菩薩の開創と伝えられています。

近郷の人々に加え、東海道を旅する人々の信仰を集め、現在でも多くの参拝客で賑わっています。境内の本堂・鐘楼・愛染堂の三棟は国の重要文化財です。

本堂

西追分（にしおいわけ）（県指定史跡）

関宿の西の入口にあたる西追分は、東海道と大和・伊賀街道の分岐点です。石柱には「ひだりハいかやまとみち」とあります。

思いがけない出会い

関宿を散策途中、「菓子処・いちみ」に立ち寄りました。ご主人に色々とお尋ねするうちに、この方は関宿中町在住の一見八郎（いちみはちろう）さんで、ＮＰＯ法人・関宿街並保存会で活動されており、関宿のボランテイアガイドをされているそうです。

今年の11月5日から6日にかけて開かれる予定の「東海道シンポジウム丸子宿大会」に出席されるとのことでしたが、私は出席できなくて大変残念に思いました。関宿に行く機会があれば、ぜひガイドをお願いしたいと思っています。

枚方浜の朝鮮通信使
御馳走役と唐人波戸場

交野市天野が原町　堀家 啓男

朝鮮通信使が来訪した時、枚方三矢の本陣裏、枚方浜（三矢浜）に絢爛豪華な御座船が停泊しました。浜には上下の唐人波戸場が設置され、朝鮮の異国風官人らが船と枚方宿の宿館を行き来し、接待役の武士や宿役人らが奔走、さらに多数の町人や近郷の農民が見物に訪れました。枚方宿はお祭り騒ぎのような、一大国際イベントの興奮に巻き込まれました。

江戸時代の朝鮮通信使

朝鮮通信使とは、李氏朝鮮から派遣された外交使節団のことで、江戸時代は慶長12年（1607年）の第1回から文化8年（1811年）の第12回までありました。最後の第11代将軍家斉の襲職祝いを目的とした第12回は、財政難のため使者を対馬で聘礼するものとなりました。

通信使の旅は、まず三使（正使・副使・従事官）が漢城（現ソウル）の王宮で国王に謁見、そして南大門を通り、陸路で釜山に向いました。

楼閣焼失前の南大門
（正式名は崇禮門）

釜山からは、朝鮮国が新造した6隻の外洋船で対馬に向かい、その後、対馬藩主の宗氏が先導役となり、海路、大坂に向かいました。

御座船淀川を遡る（第11回の様子）

宝暦14年（1764年）の第11回「家治襲職祝賀」は江戸まで行った最後の大規模な通信使でした。

一行は大坂沖で吃水の浅い川御座船に乗り換え、難波橋付近に上陸、10日あまり大坂に滞在しました。宿館は西本願寺津村別院（北御堂）で大坂城代が上使として「問慰役」となり、「御馳走役」は岸和田藩岡部家（5万3千石）が担当しました。

宿館には多くの学者、画家などが訪問、文化交流が行われました。その後、帰国準備の船将や水夫など、三分の一に当たる約100人を船に残し、一行は江戸をめざします。

まず、難波橋付近から再び

川御座船に乗り、淀川を溯上、枚方浜でいちど小休し、淀へ向かいます。幕府が用意する御楼船は紀州藩などが提供し、高殿が付き、葵の紋章を随所にあしらっていました。西国大名などが提供する御座船は豪華絢爛で、それぞれ金箔、銀箔、黒漆、華麗な幔幕で飾られていました。

御座船はもともと各藩主の参勤交代用のもので、大坂の蔵屋敷で保管していました。全長98尺（約29ｍ）、幅20尺（約６ｍ）という大きさでした。水夫は亀甲文様の衣装を着て、舟歌を歌いながら棹を挿しました。

船団の先頭には通行を告知する鳥船が行き、次に先導役の対馬藩主宗氏の御座船、続いて巡視旗、清道旗、刑名旗などの行列用道具を運ぶ上荷船、さらに楽士と楽器を乗せる百石船、そのあと対馬藩関係の随行船、そして一行を乗せた本隊となります。

まず上官を乗せた書簡先導船が２隻、続いて書簡轎（きょう／椅子のような乗り物）を乗せた書簡船（浪速丸）、正使を乗せた紀伊国丸、副使を乗せた土佐丸、従事官を乗せた中土佐丸が行き、続いて上々官を乗せた第１船から第３船、上判事を乗せた第１船から第３船、対馬藩の鯨船と続きます。さらに朝鮮との外交監視のため、幕府から対馬「以酊庵」に派遣されていた京都五山の輪番僧長老の御座船が２隻、対馬藩士などを乗せた御座船数隻が続きます。これら約40数隻に随伴する供船数10隻、あわせて１０５隻の大船団でした。朝鮮の音楽隊が奏でる音楽が流れる川面を、綱引き人足に曳かれて遡行し、順次枚方浜に着きます。（「朝鮮通信使」大阪市立博物館）

通信使一行の川御座船の中心は国書を載せた国書船（書簡船）、その船を先導する船を描いた屏風の一部。青丘文化ホール蔵。本会発行の「枚方の今昔」から転載。

綱引き人足は、三使などが乗る御楼船４隻（浪速丸、紀伊国丸、土佐丸、中土佐丸）について１隻当たり80人。御座船７隻、うち１隻当たり90人が２隻、１隻当たり80人が２隻、１隻当たり70人が３隻各、その他合わせて総数１０５隻について、出口村から枚方宿三矢村までの綱引き人足１４７８人が流域の村から動員されました。このほか水深の浅い川底を浚うため、事前に川浚い人足が動員され、夜間の明かり確保のためには川岸に提灯や、かがり火がたかれました。（中島三佳著「東海道枚方宿と淀川」）　枚方浜では緊急時の連絡などに当たるため、くらわんか茶船も動員されました。

枚方浜の御馳走役　亀山藩は波止場新設

一行が小休する枚方浜では

早くから出迎えの準備が進められました。接待を担当する「御馳走役」はおおむね近辺の大名が充てられましたが、今回は到来予定1年前の宝暦13年（1762年）3月12日、老中から丹波亀山（亀岡）藩（5万石）松平紀伊守が命じられていました。また、陸上輸送を担当する「御賄方」は、当地（幕領）を支配した幕府代官平岡彦兵衛が別途命じられました。

亀山藩藩士、樫田団蔵（大目付）の記録

堅田団蔵は、宝暦13年（1762年）5月1日、藩主から通信使悉皆御用係を命じられました。団蔵はその月の後半には関係者とともに現地枚方を視察します。そして7月には枚方宿における通信使宿館の補修などの普請に取り掛かり、9月には終わります。10月には通信使先導役である対馬藩の見分に立ち会います。

11月9日、大雨のため淀川が満水となりました。枚方浜に臨時に設置した上下波戸場は流失の危機に直面しましたが、藩士を挙げて無事乗り切っています。その後、亀山藩主が急死したため引継ぎなどにおわれます。12月に入ると朝鮮国から献上の鷹、翌年1月16日には馬が枚方宿を通行し、この御馳走御用を務めます。24日には対馬藩の役人が宿割で来枚し、御馳走御用。26日には献上の御荷物が通行、御馳走御用を行います。

いよいよ宝暦14年（1763年）1月26日の本番、早朝から藩士全員が持ち場につき通信使接待の準備に当たります。しかし、三使一行の到着が遅れ、翌朝の27日午前6時頃、枚方浜に到着しました。三使は船から降りて上陸、団蔵らは宿館にて御馳走御用を務めます。

昼前、一行は淀へ向けて出発します。淀に上陸した一行は陸路で江戸への行列を連ねます。そして翌月の4月4日午前11時頃、今度は江戸から帰る通信使一行が枚方浜に到着します。このときも御馳走御用を行います。

同8日、団蔵ら御用係2人で諸道具競売の入札を行います。同21日、御馳走御用費用の精算を完了。同23日、朝鮮人御馳走御用をすべて完了し亀山城へ帰ります。団蔵の出張期間は138日でした。団蔵はこれらの経過を藩主に提出した先祖書に詳述していました。（先祖書　亀岡市歴史資料館蔵）

亀山藩藩士、及川廣方（馬廻）の記録

丹波亀山藩の中堅藩士、及川廣方（馬廻150石）は、通信使御馳走御用に関する覚書「及川家文書256河州牧方務筋覚書」「及川家文書257河州牧方上下波戸場覚書（京都府総合資料館蔵）」の2編を残し、枚方浜での「御馳走役」接待の準備、当日の状況を詳しく記述しています。廣方は、派遣された接待係の一員で枚方浜の上波戸場を担当した現場責任者、裁許人4人のうちの1人でした。

御馳走役の準備の記録「河州牧方務筋覚書」宝暦13年（1763年）

準備は万全、唐人波戸場もばっちり

この覚書は通信使来訪前に廣方が作成しました。これと

は別に過去の備忘録「御馳走帳」（通称「帳面」）を参考に廣方などが打ち合わせをしたマニュアル帳と思われます。

この覚書には、淀の唐人雁木（通信使来訪の際、宇治川に面して淀藩が仮設した2面の木製桟橋）に匹敵する張り出しの木製「波戸場」を枚方浜へ臨時に設置し、その上下2ヵ所の詳細を記しています。いわば枚方浜の唐人雁木ともいうべきものです。

上波戸場　横5間（9．8m）、長さ20間（36．4m）、方18間（32．76m）

上波戸場には上波戸場御番所が置かれ、廣方などが詰めるとしています。

上波戸場より町通りまで12間（21．84m）、幅4間（7．28m）あり。

上波戸場は「上官」以上の乗降用としています。宿館となる本陣は、上波戸場からみて東南東の方角にあるとし、道程は40間（72．8m）とあり、これは枚方宿本陣を指すようです。

三使が上陸のときは上波止場に薄縁を敷き、さらに本陣門前までの道筋、門内に薄縁、上陸しないときは波戸場に薄縁を敷くとしています。

下波戸場　幅3間（5．46m）長さ10間（18．3m）

下波戸場より町通りまで11間（20．02m）、幅3間（5．46m）。

上波戸場の西（下流にあたる）に位置し、中下官の乗り降り用としています。

枚方浜復元図
（現在とは川面域が異なる）

当日、朝食は宿で支度。午前8時より持場につく。昼食、夕食は握り飯とし、食札と引き換え。官人、長老、通詞が上陸するときは、宿舎の亭主は麻裃を着て、波戸場へ出迎える。どの官人は宿何屋、誰それと書いた紙を竹にはさんで持参する。各船に誰が乗っているかは船に掲げている籏により判別する。例えば、「正使」は青色の籏で「正」の字を赤く染めいれ、夜は提灯に「正」の字。正使の供船は青色で「正ト」の字、御鷹船は紺の籏に白文字で「御鷹」のごとく、官人ごとに籏の色、文字を記述。

先導役の対馬藩主は三使より先立って着船。宿舎への先払いは不要、その家来についても同様。対馬藩主の菩提寺、西山寺の関係者は今回随行し

ない。三使が着船するごとに合図の鉄砲を放つ。出船の場合も同じ。三使は上陸することもある。

輿、船より揚げ下ろしの節は、持夫は御賄方から差し出される。書簡輿は、三使が上陸しない場合でも波戸場には揚げる。三使が上陸する場合、夜中は輿1丁につき箱提灯4張り添える。箱提灯およびその持夫は御馳走役が差し出すこと。箱提灯12張りは上波戸場、番所に入れておく。書簡輿2丁も一丁につき4張りで、8丁の箱提灯を用意する。持夫もあらかじめ用意。

三使が上陸する場合、書簡輿を先に立て、そのあと三使が上陸。上々官は庵かんむりのような頭巾、中官は笠に尾さし、下官は笠のみ。三使通行のときは番士、下番の者は土下座、上々官以下の場合は土下座はいらない。上陸しないときは、上官以上は船内で食事をとることになるため、その場合は料理に携わる官人が船を降り、それぞれの宿において調理した料理を御馳走役で用意した人足により波戸場まで運んだものを提供する。

三使異変、故障重きときは早追御使い札、軽きときは御飛札で関東にお届け。

宿割り

三使上々官及び小童（警備等雑務要員のこと）
宿　本陣池尻善兵衛
上判事宿　紹屋仁兵衛
上官宿　丸屋次兵衛
次官宿　坂本や伝右衛門
中官宿　大塚や丑之助
大和や嘉兵衛
大塚や金兵衛
津国や新六
柏屋理左衛門
銭や藤四郎

通信使通行後の記録「河州牧方上下波戸場覚書」　宝暦14年（1764年）

正使船遅れ、浜は大混乱

通信使の通行が終わった後、上波戸場の裁許人として体験したことを廣方が覚書したものです。廣方の資料によると往路では、三使は枚方浜に上陸、本陣で休憩、食事をとったようです。復路は寄港しましたが、船内食事か宿館でかは不明です。

廣方など藩士は予定通り、通信使一行が大坂北御堂を出発した1月26日、午前8時頃から熨斗目麻裃を着て、波戸場などに詰め、午後1時半頃には全員持ち場に着きました。

26日午後5時頃、官人一番船が枚方浜に着船、夜中にかけて追々着船しましたが、「正使」などの船はなぜか大幅に遅れ翌朝になりました。しかも着船は計画と異なり、上下波戸場を問わず、ばらばらで綱引き道にまで着船することになったようです。また、波戸場に着船した船がそのまま動かず、後の船の邪魔になり浜は大混乱でした。

三使船より先に輿船が着き、対馬藩から輿の台を置くよう指図されたが、輿の台が届いておらず、大坂から届くまで船に置いておいたとのことです。その後、輿は上波戸場に並べ、対馬藩の足軽が付き添いました。

夜は亀山藩で提灯3張りを出し、持人も配置しました。三使の駕籠かき人足は1輿12人ずつ、上々官3人、医師、儒者の乗り物5丁については、1丁につき8人ずつ。御賄方の代官手代に交渉し配置してもらったようです。宿舎に関しては、通詞が1、2隻にし

か同乗しておらず、宿への案内ができず、中下官は宿札を見て、気ままに直接、宿舎へ行ってしまい、宿の者も言葉が通じず大混乱となりました。通詞６人を宿舎へ案内したが、宿の名簿と異なり、饗応できず、通詞は船に戻ってしまった。別の通詞ひとりが案内を求めてきたので、定められた宿舎に連れて行ったところ、これも宿の名簿になく、結局、亀山藩士が交渉し、無理やり宿舎にいれさせたとのこと。

先導役の対馬藩役人は自主的に行動するはずであったのに、枚方宿の状況を全く知らず、亀山藩の役人が宿割りの案内を掲示している台鏡寺入り口まで案内することになってしまった。（このことから先導役の対馬藩主一行は台鏡寺を本陣として小休したことが考えられます。

台鏡寺は紀州藩の通行のときも臨時に家老の本陣を勤めたようです。）宿の亭主がそれぞれ出迎える予定のところが「御賄方」の都合で、突然町役人４人のみの出迎えに変更となり、人手不足で混乱し、結局、亀山藩が人足を出して応援しました。先着の船のあと、三使船の到着が大幅に遅れ、心配した先着の官人から出迎え船を出すよう依頼されたが、なかなか準備できず、混乱したようです。

残念ながら、廣方は現場監督程度でしたので、御馳走御用にかかる経費や、饗応した食事の記録などは残していませんが、枚方浜の上陸用波戸場など、朝鮮通信使に関する貴重な資料となっています。

（参照　京都府総合資料館蔵、「及川家文書２５６　２５７」樫田弘一訳）

機関紙の文責について

宿場町枚方の文章のうち、著者名のあるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、若干原文と異なる部分もありますが、内容は原文に沿っていますので、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

新入会員紹介

（平成28年10月1日現在）

宮川　敏夫さん　楠葉野田
中司　宏さん　宮ノ阪
岡本　恒夫さん　山ノ上
谷村　節さん　奈良市朱雀
長谷川方子さん　山ノ上
大澤　博和さん　招提南町
森本　峯生さん　楠葉中町

会員を募集しています

本会は、年数回の講演会や観光バスを利用した他宿場などの日帰り見学会、会誌（本誌）を発行しています。会費は３６００円（１年度）です。入会をお待ちしています。ご希望の方は上野まで。電話（８３２）５７２２。